

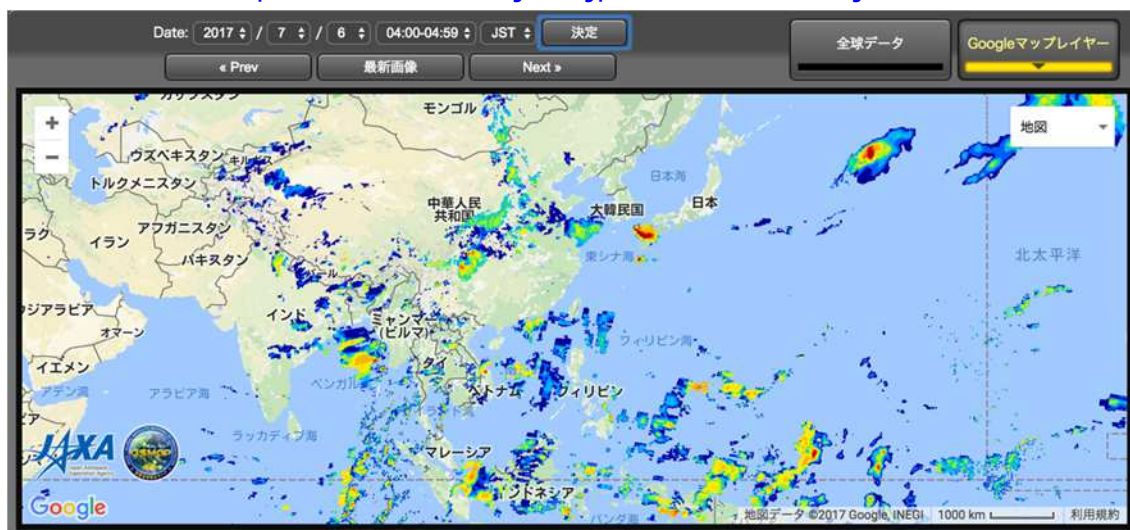
## 九州の豪雨災害

多くの犠牲者、被害が報告されている九州での大雨ですが、やはり地球温暖化を実感せざるを得ない状況なのかも知れません。熊本でも昨年の地震に引き続き、再び大きな被害が出ているようです。お亡くなりになられた方、被災された方に心よりお悔やみ・お見舞い申し上げます。

前にも述べましたが、今後は豪雨と地震といった複合災害も考慮した BCP が必要になってくると思われます。現在の九州地方は地盤が地下水で飽和しており、少しの地震動で土砂崩れや斜面崩壊が極めて誘発されやすい状況となっています。

読者の皆様の中には、世界中を飛び回っていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。宇宙航空研究開発機構（JAXA）では、世界中の雨量を準リアルタイムで公表しています（GSmap）。このサイトでは、過去 24 時間や 72 時間といったデータも見ることができます。皆様も旅行や出張の際などにお役立て頂けるのではないかと思います。

[http://sharaku.eorc.jaxa.jp/GSMaP/index\\_j.htm](http://sharaku.eorc.jaxa.jp/GSMaP/index_j.htm)

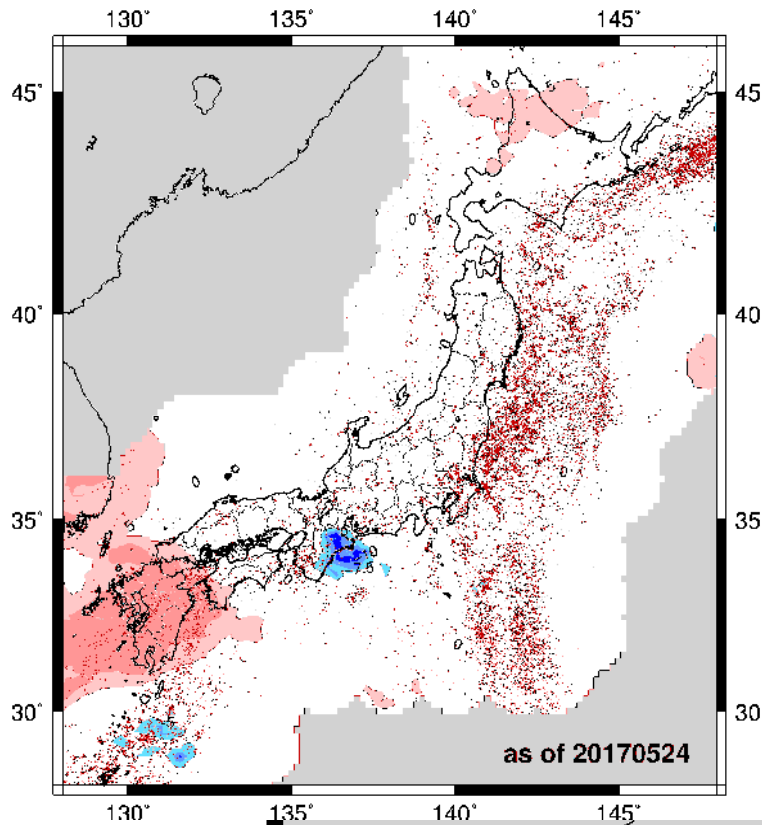


上の図は 7 月 6 日の午前 4 時-5 時の間の 1 時間雨量です。九州で極めて激しい雨が降っていたことがわかりますし、同時に中国内陸部もかなりの降水があったことなどを知ることができます。

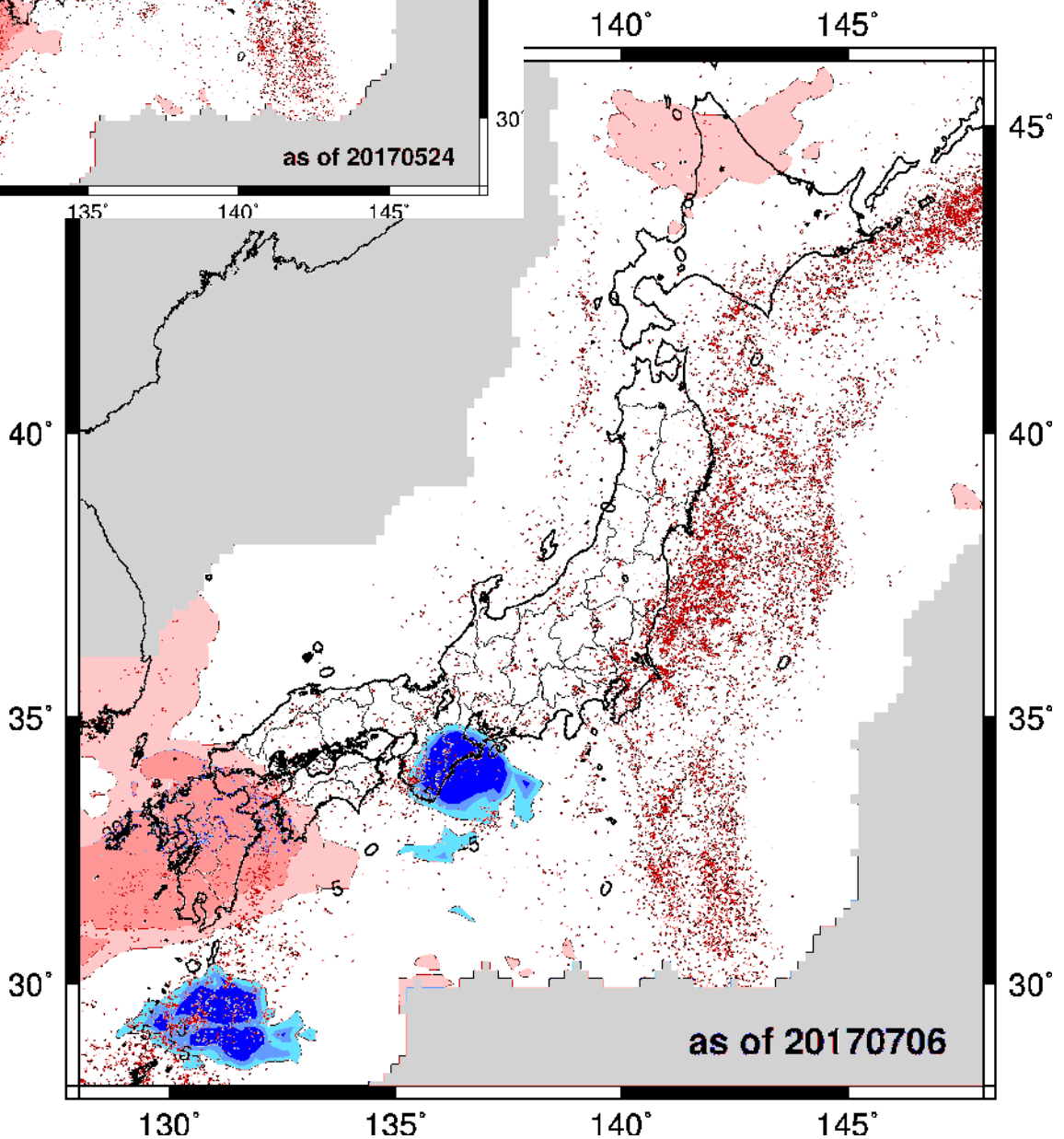
## 7 月 6 日時点の海域を含む日本列島全域の地下天気図®

5 月 29 日付のニュースレターで、紀伊半島沖の地震活動静穏化のピークが過ぎた可能性があるとお伝えしましたが、7 月 6 日までのデータの解析で、再び静穏化が強くなっている事がわかりました。過去の経験則が正しければ、まだ地震発生の可能性は低いという事になります。これまでの経験則では、異常が消えてから地震が発生したケースがほとんどでした。またこの地下天気図では、東海地方・関東地方・東北地方およびその沖合地域につきましては、2011 年の東日本大震災の影響を大きく受けているため、解析の精度が劣っています。そのため、これらの地域につきましては、別々の情報という形で地域ごとに解析を行っています。

今回の地下天気図解析で、南西諸島で顕著な地震活動静穏化が進んでいる事が判明しました。



左：5月24日時点の地下天気図  
紀伊半島沖の異常のピークが  
この時点では過ぎたように見えた



7月6日時点の海域を中心とした地下天気図。紀伊半島沖の異常のピークは  
過ぎていなかった。また南西諸島で顕著な異常が認められるようになってきた。